ヨゼフ会便り

発行者　ヨゼフ会　横浜市中区山手町 44 番地 カトリック山手教会内
第 47 号　　2023 年 3 月 25 日発行

¶「何に賭けるのか」

助任司祭　西村 英樹

山手教会の皆さま、こんにちは。早いもので、山手教会に赴任して２年が過ぎました。振り返るにはまだまだ早いと思いますが、コロナ禍での助祭叙階、司祭叙階そして、助任司祭として赴任して通常とは決して言えない状況下での新司祭としての活動でした。信徒の皆さまのお力添えいただいたおかげで、なんとかかんとか使命を果たせてきたように思います。感謝です。同時に限界も感じており、時間が過ぎれば過ぎるほど、働く機会が増えれば増えるほど、喜びもありますが、自分の足らなさ無力感にさいまなれる事もしばしばです。結局は、静かに手を合わせ神を見上げ「主よ、あなたの御手におゆだねします。なにとぞ、どうかあなたの救いがありますように」と祈る以外に自分には出来ないのだなと痛感しています。

さて、最近の私の興味の対象は、もっぱら芸術や音楽のようで､触れる機会も増えたように思います。とはいえ、実際にはあまり堅苦しくならないお手軽なものから入っている興味なのですが…。

先日ミサの説教でも取り上げたのですが２月２６日は、岡本太郎の誕生日でした。それを受けてか NHK でも岡本太郎特集のような企画が組まれ、特撮ヒーロー「タローマン」とか太陽の塔の制作秘話とかについて放送されていました。彼は川崎市高津区の出身で、川崎市には「岡本太郎美術館」があります。わたしも９年ほど前に行きました。細かな技法だとか、構成とか構図とかその辺はよく分からないのですが、見ていて気持ちが落ち着かない、ざわざわする、なにかかき乱されるのだけれど理由が分からない。そうした感情を揺さぶられる「何か」を与えてくれます。

音楽は、わたしは学生時代トランペットを吹いていたのですが､JAZZ ファンでよく「クリフォード・ブラウン」や「マイルス・デイビス」「チャーリー・パーカー」「バド・パウエル」「セロニアス・モンク」などをよく聴きました。つまり即興を中心とする

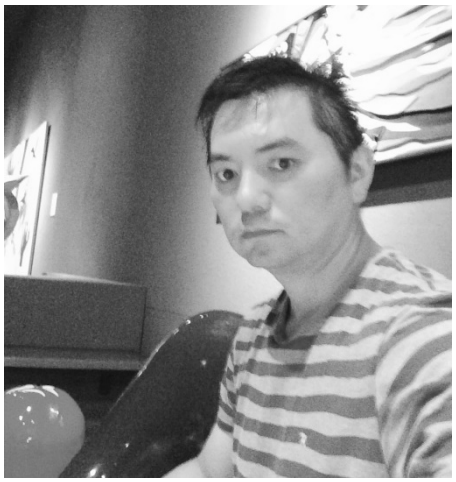
BeBopJAZZが大好きなわけですが、最近JAZZをテーマにしたアニメ「BLUE GIANT」が公開されました。アニメですから当然演奏はプロの吹き替えになります。担当されたのはJAZZピアニストの上原ひろみさん。さすがの聴きごたえです。

私自身は、絵を描かないしもう楽器も演奏しません。しかし、心揺さぶられる何か？にいつも惹かれています。わたしたち宗教者が、学者や政治家と違うのは大きな事を言えば「真理の探究」という軸がある事だと思います。何か一つ、重要な事を得ると、他の事を捨ててしまう人がいます。「神父様、分かりました！祈る事は委ねる事ですね。」その通りです。しかし願い求める祈りが間違っているわけではなく、「やもめと裁判官」の例えのように絶えず希望を持って祈る事もまた真理なのです。岡本太郎は「対極主義」を唱えました。「神に委ねる賛美し感謝する」と「執拗に祈る」は矛盾しないのです。「神様、いまの私はこんなんです。どうか助けてください。一緒にいてください。」と自分の思いを吐露するのです。そして「…。いや、いつも与えてくださって感謝します。いつも愛してくださって感謝します。あなたは私といつも共にいてくださっています。」という賛美と感謝に変わるのです。JAZZプレイヤーの即興のように。

司祭として働くようになって、日々新しい事に出会っています。生まれて初めて洗礼を授けた時は、感慨深いものがありました。結婚式の司式をした時は、自分の事以上に嬉しく、またこのカップルへの祝福を強く感じました。ご葬儀を執り行う時、また納骨の式を行う際、一人の人の人生の終焉に立ち会っている中で、私自身の信仰生活を強められている事、そして新しい気づきが与えられました。

新受洗者のためのフォローアップ講座を担当させて頂き、また幾つかの講話をさせて頂きましたが、一キリスト者として自分がいままで経験してきた事、苦しみ悩んできた経験や主に与えられた恵みについて、皆さんと分かち合う事が出来ました。「ああ、あの時あった思った経験した事は、今日この瞬間のためにあったのだな」と、なにか報われた思いがしていました。

いつも大きな喜びを感じています。主日の説教、週日の修道会でのミサを執り行うことは喜びです。ゆるしの秘跡や病者の塗油の秘跡を施す事は、神と人との和解の瞬間、救いの訪れという神聖な時に立ち会っているという喜びがあります。



¶梶原敏孝さんを偲んで

澁谷 信男

私が５０歳を迎えた時、ヨゼフ会の梶原さんから電話をいただきました。ヨゼフ会入会のお誘いでした。当時のヨゼフ会は５０歳になった男性信徒が自動的に加入するシステムになっていました。しかし、私が加入しなかったので、梶原さんからお誘いが来たのです。私は、まだまだ若いつもりでいましたので、お年寄りの仲間入りはご遠慮したいとお断りしたのですが、梶原さんは、まあまあそう言わないでと、無理やりに私を入会させました。若い信者仲間からは、「澁谷さんもこれでお爺ちゃんの仲間いりだね」と冷やかされましたが、実は、これが天国への入り口だったのです。

ヨゼフ会に入会してみると、活動熱心な先輩たちがきら星のごとく席を並べていて、五島列島やヨーロッパ、韓国の巡礼旅行、諸宗教との対話と称してキリスト教、仏教、イスラム教など様々な宗教家を

招いた講演会、それに毎年の黙想会や教会行事への参加など、充実した活動が次々と行われていました。諸先輩の中でも特に際立っていたのが、毎年、巡礼旅行を企画してくださった行動派の竹沢さんと、講演会を担当された理論家の梶原さんです。梶原さんは、東京大学を卒業されて日本鉱業に勤務し、南米のチリやキューバ、マレーシアなど海外生活を多く経験されました。

梶原さんがキリスト教の世界に入ったのは、中高と通った関東学院の影響だったようで、内村鑑三の書籍を読み漁っていたそうです。社会人になってからは、会社の帰りにカトリックの勉強会に参加し、１９８１年に浅草教会で洗礼を受けました。ヨゼフ会では講演会を担当し、鶴岡八幡宮の宮司やイスラム教専門の大学教授、寺の僧侶など、人脈の広さを生かして驚くような講師をたくさん呼んでくださいました。私たち信者は、他の宗教と比較することによって、キリスト教への理解を深めることができたように思います。家の床が抜けるほど多くの書籍を蓄えた読書家の梶原さんは、どのようなテーマについても実に詳細な解説をしてくださいました。

２０００年にヨーロッパ大聖年巡礼旅行に行った時は、梶原さんの提案で事前の勉強会が催され、私は、ルルドの奇跡について発表させられました。いくつかの文献を読み続ける中で、ルルドの奇跡は熱心な信者の身に起こるのではなく、熱心な信者が、他の患者のために一生懸命祈ってあげると奇跡が生じることを知りました。これは、私にとって宗教観が変わるほどのできごとでした。梶原さんは、教会の教えであっても漫然と鵜呑みにするのではなく、自分で聖書や文献に当たって常に信仰を洗い直すことを試みておられました。他の会員の意見にもしっかりと耳を傾けてくださり、黙想会の後の飲み会の席では、口角泡を飛ばして議論しておられたのが印象的です。

私の若い頃は、黙想会というと私語は厳禁で、食事の合間にも聖書の朗読に耳を傾けながら黙々と箸を運んでいました。しかし、山手教会では、信者のコミュニケーションを大切にしておられた故バーク神父様が、黙想会の後にお酒を飲みながら分かち合いをすることを提案されて、私はお酒の仕入れ担当になりました。黙想会の会場となった女子修道会の台所で冷蔵庫に缶ビールを詰め込んでいるとお年寄りのシスターが目を丸くして、お酒を飲まれるのですかと絶句しておられたのが今でも脳裏に蘇ります。お酒好きの梶原さんは、この分かち合いが本当に楽しかったのでしょうね。顔を赤らめながらいつ終わるとも知れず、信徒の方々と様々な議論をしておられました。

非常に印象に残っているのは、梶原さんが、雅楽のグループに参加して笙を吹いておられたことです。日本雅楽会に所属して会社の帰りに一日も休まず練習に通い、毎年、国立劇場で演奏活動をしていました。私の家の近くの神社で町内会の催しがあり、梶原さんが雅楽の衣装に身を包んで笙を奏でる姿に私は深い感動を覚えたのを記憶しています。

梶原さんは、また、昔の横浜天主堂に安置されていたキリスト像の保存会を設立して、保存活動に熱心に取り組んでいました。おかげで、キリスト像は今なお、山下町の地下鉄入り口付近で行き交う人々を静かに見守っています。

私がヨゼフ会を通じて梶原さんから学んだことは、自分の信仰をいつも見つめ直して勉強を続けることでした。梶原さんは、２０２２年5月３１日、８６歳で主の御許に召されました。良き先輩に心より感謝の意を表したいと思います。

2013 年 5 月東日本大震災後の巡礼旅行　遠野教会にて

2013年5月東日本大震災後の巡礼旅行　気仙沼教会にて

¶「縄文文化」に魅せられて

花田 賢弘

私は、２０１７年春に洗礼を受け、昨年秋には長年勤めてきました建築・土木・造園分野の専門技術者業務を退職いたしました。

今回は参加させていただいています聖堂改修工事に伴う修繕委員会の活動のご報告と、趣味としている「縄文文化」について簡単にご紹介できればと思います。

修繕委員会活動の中で、私は主に建築契約書や建物の安全のための補修工事などをお手伝いしています。建物内外の聖堂改修工事ですが、安全で照度や音響にも配慮し創建当時のデザインができるだけ保持できるようにと、他の修繕委員の皆様と日々活動しています。

ちなみに、建物の強度についてお話しますと、創建から９０年以上となります山手教会は、調査の結果、現在の耐震基準に照らし合わせてもギリギリですが安全基準を満たしていました。今回の工事では、今後も建物の劣化ができるだけ進まないように屋根葺替えの漏水補修や、天井や壁のはがれなどに伴う危険性を取り除く安全のための工事も行っています。

ただし、大地震の際には(これは新築の建物でも同じですが)大きな揺れが収まった時点で、屋外の駐車場など安全な場所への避難を、いつも心がけてください。

次に、私が趣味としている「縄文文化」について少しお話しさせていただきます。

２０２１年７月、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産に登録されました。日本の歴史では、採集・漁労・狩猟を生業に“定住”が営まれた時期を「縄文時代」と呼んでいます。移住生活を営んだ旧石器時代に続き、本格的な農耕が始まる弥生時代の前に位置づけられます。定住しながらも（農耕などではなく）採集・漁労・狩猟を生業とした「縄文時代」は“日本独特の時代区分”です。世界史では、旧石器時代の後の「新石器時代、その後の青銅器時代の一部」となります。

今回登録された北海道・北東北の１７遺跡のうち一番古い「大平山元Ⅰ遺跡」（青森県外ヶ浜町）は紀元前１３,０００年頃となり旧石器時代後の定住生活を開始した遺跡としては北東アジア最古級になるそうです。

また、世界遺産に登録された縄文遺跡群の代表と言われる「三内丸山遺跡」（青森市）は、インダス文明やエジプトのクフ王のピラミッド建設と同時期となる紀元前３,９００～２,２００年頃の遺跡です。『聖書』では、ユダヤ民族の形成時期（アブラハム、イサク、ヤコブ）の時代でしょうか。

縄文時代の中で進化した三内丸山遺跡は、「住居・墓・貯蔵施設・祭祀場・捨て場」を持つ拠点集落で１,５００年間以上も存在していました。冬至・夏至などを計る有名な６本の大型掘立柱建物跡や国内最大で横幅３０m以上もある復元大型竪穴建物などの遺跡はもちろん、たくさんの縄文土器や土偶などを直接見ることができます。その中で国宝・重要文化財の縄文ポシェットは、樹皮を縦横に編み中にはクルミが入っており、今から４,０００年以上前のもとは思えない感動を覚えました。

同遺跡はJR青森駅から４㎞と立寄易い所にあり、十和田湖（奥入瀬渓谷）や、ねぶた観光（青森市）などに行かれる際には、４,０００年以上前の縄文の空気を味わうのもいかがでしょうか。

冬至・夏至を計る 6 本の復元大型掘立柱建物

一般的によく知られている亀ヶ岡遺跡の遮光土偶は、東京国立博物館で見ることができます。発掘された青森県つがる市にある JR 五能線木造駅は、その遮光土偶をそっくりに模したもので、観るだけで楽しくなってきます。

亀ヶ岡遺跡の遮光土偶を模した JR 五能線木造駅

自然を“開拓”して農耕定住から進んできた弥生時代以降と比べ、自然と“共生”しながら定住生活を長年維持し続けた縄文文化について、小林達夫氏は「日本列島の歴史を超えた現代世界へのメッセージが含まれている」と『世界遺産　縄文遺跡』(同氏編者）で述べています。今まさに、現代社会に求められている「SDG s」（持続可能な開発）ということでしょうか。

今後も、縄文文化に親しみ学び続けて行きたいと思います。

参考文献：『北海道・北東北の縄文遺跡群』（縄文遺跡群世界遺産本部編集）
『イラスト早わかり聖書ガイドブック』(フランシス・ブランベイカー氏著)

¶「ミサ曲」雑感 ―
“今まで”と“これから”

三枝木 宏行

この稿を準備中の２月２６日、四旬節第一主日の御ミサにて、聖歌隊として新しい式文によるミサ賛歌（「いつくしみの賛歌・典礼聖歌 605」「感謝の賛歌・同 608」「平和の賛歌・同 609」）を試用しました。昨年終わり頃から採用された新式文によるミサでは賛歌部分は当面「唱えるのみ」としておりましたが、感染対策によるさまざまな制限の緩和に向かうこの時期、四旬節という節目にあたり、御復活以後の心身ともに“新(あら)たなる”時季を見据えてのチャレンジでもありました。限られた練習期間で多少の心配もありましたが、思いの外、ミサの進行にスムーズに溶け込んでいたように思えます。会衆の皆さんの感想はいかがだったでしょうか。

キリスト教信仰の有無にかかわらず、クラシック音楽に親しまれる方々にとって宗教音楽、特に「ミサ曲」という形式は深く馴染みのあるものでしょう。信者ではなくとも「キリエ」「グロリア」といった言葉は「アレグロ」「モデラート」といった音楽用語と同じように、ひとつのまとまった音楽形態の呼称として受け止められているようです。古今の優れた作曲家たちによって生み出された「ミサ曲」の数々のおかげとも言えるものですが、私自身の過去を振り返ってみると「ミサ曲」に最初に触れた時の第一印象は…「長い！」でした。ベートーヴェンの「ミサ・ソレムニス（荘厳ミサ曲）」――初手には相手が悪かったかもしれません。全曲通して約９０分は子供の身にはひたすら辛かった。ミサが宗教儀式である事

は薄々知ってはいたものの、こんなに長いものでは自分はとても耐えられない、偶さか何処かの教会の前を通り過ぎる時にはそんな事を思い出し「この場所で、あの長丁場に耐え続けている奇特な人たちが集まっているのだろうな」などと、端無くも想像を巡らしたのでした。演奏会用のミサ曲と儀式用のそれとが区別される事を知ったのは、ずっと後日の話。

思春期を過ぎ、世の憂いに心が揺れる頃おいには“死者のためのミサ曲”ーー「レクィエム」に強く魅かれるようになるわけですが、死を目前にしたモーツァルトの鬼気迫る名作はもとより、１９世紀に飛躍的に拡大したオーケストラを駆使して絢爛豪華な大伽藍に仕立て上げたベルリオーズやヴェルディなどの作品などが綺羅星の如く並び、音楽ファンにとっては、ある意味通常文の「ミサ曲」以上に人気の高い曲種ではあります。そして多くの聴き手は“最後の審判”をおどろおどろしくも劇的に描く「ディエス・イレ（怒りの日）」により強烈な印象を抱くのでしょう。一方私といえば、最初に聴いた「レクィエム」はフォーレの作品で、こちらは「ディエス・イレ」を含まない、むしろ静謐な曲調の音楽。そして「レクィエム」の表題を冠しながら反戦詩と特攻隊員の遺書をテクストとした三善晃先生の異形の作品に捕らえられ、そのまま音楽の(道無き)道へと突き進む事となるのでした。

「ミサ曲」が(そして「レクィエム」も)単なる鑑賞用の、音楽史の一頁に記されるのみの“骨董品”ではなく、祈りの力を根源としたリアリティのある“実在”として受け止められ、心の底から向き合うべき対象となったのは、やはり洗礼を受けて後、聖歌隊(ここに辿り着くまで更に紆余曲折がありましたが)での典礼奉仕を続けてきた事が大きいのだろうかと思います。聖堂に集められた会衆とともに祈りを音楽に乗せて天に送るーーと言うよりもむしろ、祈りの言葉に音楽を乗せて神に捧げる事。そのような音楽の“送り手”としてありたいと願っています。

新式文のミサ賛歌(３種類用意されています)について、音楽的な見解は各々あるでしょう。それを認めた上で、大切な点は「新しく生み出された音楽は、演奏され、聴取され、それを続ける事で成熟してゆく」事ではないかと考えます。聖歌隊だけでなく会衆全てが共に“祈りの音楽”を育てられる、そのような復活祭以後のミサ祭儀を迎えられるように祈る次第です。

※新式文によるミサ賛歌の楽譜と参考音源は、
カトリック中央協議会のWebサイトにて
https://www.cbcj.catholic.jp/2022/10/13/23391/
公開されています。

〇聖歌隊では隊員を随時募集しております。ご興味のある方はお気軽にお声をかけていただければ幸いです。

¶主を信じて、明日を信じて！

柳川 晋一

私は、この原稿の依頼を受けた２０２３年１月中旬に６４歳になりました。あと1年で高齢者の仲間入りです。この半年前、２０２２年６月末に退職し、４０年強の会社員生活に終止符を打ちました。２０１９年に還暦を迎えて１年契約の嘱託社員になり、２０２１年夏に、翌年はどうしようと考えていた矢先、中学からの友人で、山手教会の信徒仲間でもあったNさんが8月末に帰天され、死がとても身近に感じられるようになりました。彼は高校の副校長兼美術の先生で、教育者としても画家としても志半ばで旅立ち、さぞかし無念だったろうと思います。老後にやるべきこと、やりたいことは早く始めねばと焦りだしたのはこの頃です。

ダメ押しは典礼委員長への就任でした。その前年に、当時のO典礼委員長の補佐的な仕事を引き受けましたが、その一年後、Oさんの教会委員長への就任が決まり、その後任選びで思いがけず指名されました。さすがに一瞬躊躇しましたが、典礼には関心があったので、なんとかなると信じて拝命し、昨年6月末に退職した次第です。

経済的な理由以外にも、使命感、責任感を持って

仕事を続けられる方は多く頭が下がりますが、多様性が尊重される今、私のような選択があっても良いのだろうと思っています。時間は限られていますので、仕事でも奉仕でも趣味でも、自分自身で出来そうだと思えることをするのが大事で、それができている自分は幸せです。

典礼委員会は想定以上にやることが多く、復活祭や降誕祭の前の神父様や多く方との調整や準備作業に加えて、昨年は１１月にミサ式次第の大きな変更があり、戸惑いながらも都度奉仕の皆さんに助けられて、何とか対応してきました。今年の課題は、少しずつコロナ禍前に戻す対応ですね。

他にも幾つか奉仕をしています。気を抜くと厳しい指摘を受ける共同祈願作成会では、祈りのことばを教えられ、みこころコーナーは、聖品の知識が深まり、信徒の方との貴重な交流の場です。

日曜日朝ミサの案内係は、寒い日暑い日は大変ですが、「いつもありがとう」と言われると報われる気持ちがします。

趣味では、子どもの頃から運動神経が鈍く不器用で、体育と図画工作が大の苦手でしたので、絵を描いたりスポーツを楽しむことは論外。幼稚園の頃に先生が弾くオルガンが好きで、オルガンやピアノを習っていたことが決め手になりました。

５０代後半に相次いで両親を見送り、少しでも教会の近くに住もうと、日ノ出町のマンションに引っ越し、そこでピアノを購入してから半世紀ぶりに習い始めました。４年目に入り、６０分のレッスンを月４回受けています。課題曲は１９７０/ ８０年代に流行した洋楽が中心です。若い先生に、６０歳になってもまだまだチャレンジできると励まされ、老後も希望を持ち続けたいと思いつつ、下手ながら弾いています。昨年末に亡くなられたベネディクト１６世名誉教皇や、映画で名誉教皇を演じた名優アンソニー・ホプキンスのように高齢になっても静かにピアノを弾いている姿には憧れます。

もう一つ、引っ越した日ノ出町は野毛の隣ですので、飲む場所には事欠きません。現在は３軒の行きつけがあり、店での会話を楽しんでいます。

以前、信徒の飲み仲間の方から、「柳川さんは飲まないと面白くない。」と言われたことがあります。そう言われると、教会、趣味、日常生活、それぞれで少しずつ違う顔がありますね。

ともあれ、これからも教会活動を含めて、何事にも「明日はもっと良くなる」と信じて笑顔で精進したいと思います。「ご機嫌も正解も自分で作るもの」という、某ラジオMCの言葉が好きで、心がけています。この原稿を書いていて、子どもの頃、なかなか乗れなくて父親から自転車の特訓を受けたこと、宿題の作文を母親に直されていたことなども思い出しました。こんな私ですが、主が近くに、わけてもリノベーションで輝きを取り戻した我らが聖堂にいてくださることを信じて頑張りますので、引き続き宜しくお願いいたします。

¶ヨゼフ会の昨年度活動について

1）２０２２年度の活動

昨年も新型コロナの感染予防のため会独自の活動ができず、１１月の帰天者のための追悼ミサ、ヨゼフ会便りの発行、ミサの案内、先唱、朗読等の奉仕にとどまり、活動状況報告の場がありませんでしたので、本誌上で報告をさせていただきます。

2）２０２２年度の会計報告

(1) 収入の部

・前年度繰越金：	1,099,262円
・ヨゼフ会費　：	0円
・預金利子：	10円
・寄付　　：	10,000円
（計）	1,199,262円

(2) 支出の部

・新受洗者へ聖書贈呈（９名分）	16,830円
・追悼ミサ分担金：	10,000円
・ヨゼフ会便り印刷費：	49,500円
・講演会　講師謝礼：	125,000円
・聖堂修繕のための寄付：	200,000円

・木曜ﾊﾟﾄﾛｰﾙ寄付：　38,023円
・事務、通信費等：　5,190円
・翌年度繰越金；　753,749円
（計）　1,199,262円

3）２０２３年度の予算

今年度も例年並みの活動は困難と判断し、会費を徴収せず繰越金で運営することといたしました。

4）今年度の役員について

次の１８名で運営いたします。（五十音順）

・会　長：岡崎　芳浩
・副会長：久保田 智洋、時久　毅
・会　計：世界　孝二
・幹　事：石澤　正夫、稲見　友一、小倉　謙、川田　耕嗣、佐藤　康夫、澁谷　信男、末澤　二朗、田中　広一、坪井　暢、古谷　信彦、宮　裕一、柳川　晋一、
・監　事：青木　淳、佐々木　和男

¶ヨゼフ会活動報告（１２月～３月）

主にミサの案内等の教会奉仕活動を行いました。

・１２月２４日（土）降誕祭ミサ奉仕

教会ホールで行われた降誕祭ミサの準備、案内片付け等の奉仕をヨゼフ会中心に行いました。

・３月２５日（土）：ヨゼフ会便り第４７号発行

¶ヨゼフ会活動予定（４月～６月）

・６月上旬：チャリティーコンサート

聖堂修繕の完成に合わせ、ロザリオ会・福祉委員会協賛でチャリティーコンサートを計画しています。内容の詳細については近くなりましたらご案内しますので、楽しみにお待ちください。

・６月２４日（土）：ヨゼフ会便り第４８号発行予定

徐々に、活動制限が緩和されつつありますので今後活動再開が決まり次第改めてご案内いたします。

¶会員消息

１２月１５日から３月１４日までに帰天された方はいらっしゃいませんでした。

¶編集後記

「みつめいたり」２号わたり昨年帰天された竹沢荘一さんと梶原敏孝さんの追悼文を掲載いたしました。ヨゼフ会と山手教会に足跡を残されたお二人の温かい想いを少しでも受け止めていただけたでしょうか。

１９６８年５５年前フジＴＶで放映された「みつめいたり」という連続ＴＶドラマがあった。主演はデビュー間もない俳優座栗原小巻、共演高橋長英。物語は、金沢を舞台に昭和初期戦時中の若者の成長物語で、その当時の反戦テーマも踏まえられていた。

脚本は山内久と立原りゅうご夫婦。立原りゅうは小津安二郎作品で多くの脚本を共作した野田高梧の長女である。そのドラマの冒頭に文学座芥川比呂志朗読による「みつめいたり」という詩が流れる。詩の作者はドイツ文学者で詩人、茅野蕭々（ちの しょうしょう）。立原りゅうはこの詩を大変気に入りドラマと共にあり続けたのだという。改めて紹介したい。

みつめいたり　茅野蕭々
みつめいたり　みつめいたり
いずこをと問わるるを　答ふべき術も知らねど
ただ　みつめいたり
魂も　はりさけんばかり
その頃の　懐かしさよ

私の周辺で近年友人が亡くなったという報せを聞くことが多くなった。私自身、戦争・東京大空襲・敗戦は知らないが安保闘争・高度経済成長・連合赤軍・学生運動・８０年代の文化芸術の高揚・バブル崩壊・東日本大震災は知っている。物価高騰、少子高齢化、デジタル化が進む中復活祭を迎え、前を向き立ち止まるとこの詩を思い起こしてしまう。本当に大切なものは何なのか。祈りのうちに。（坪井暢）